大和名所記

第十九

十市郡

特別
ル4
3979
14

門ル4
3979
14

和州舊跡幽考目録

第十九卷十市郡

磐余葦玉宮　池辺雙槻宮
磐余池　用明天皇陵
磐余若櫛宮
磐余若櫛宮　付市磯池○榛上室山櫛事
磐余甕栗宮
磐余玉穂宮　磐余野
磐余　付猛田○城田○頬枕田事
土葬墓

昭和二七年三月十八日求
小林藏書

阿部崇敬寺付文殊大士○運覚沙門事
阿部嶋山
高屋安部神
荻田寺
天香久山
香久山の社
真善寺
上宮
陵
椋橋川
膳部村
鏡池
二階堂
香具山の宮
啼沢女神
埴安
浅古
倉椋の宮

倉椋離宮
下居里
倉橋山付大鏡出事
談山妙樂寺付十三重の塔○聖靈院○大織冠像○再真○定恵和尚○増賀上人の墳○如覚禅師墓事
紅葉洞
兩槻宮
春井
音石寺
倉椋奇宮
崇峻天皇陵
多武峯
詰山
淡海公墓
紫蓋寺
耳梨山

耳梨行宮
耳成川
村山
十市里
常盤里
竹田村
耳梨池
目無川
高山
多社
穂積
延喜式神名帳

和州舊跡圖考第十九卷

十市郡

磐余玉宮

又譯語田宮日本紀 又池田宮古事記 也

紀曰大伴佐の東智井里を譯田と

紀曰十市郡

人皇廿一代敏達天皇四年宮殿をつくり給ひ

むや海部の玉乃家絲井三の家地をうつ給

せ給ひしようつるひ心ようるひけるよ

養國を徳へ〜より宮を澤田うつ給ひ

て幸玉乃宮と名づけ給ひや日本紀 延

喜七年造九一千百五十九

池邊雙槻宮

校案畧記より十市の郡雙槻宮一ヨリ磐
余池迫雙槻宮又ハ池迫列槻宮とも
或説より高市の郡とも乃ち玉林抄より曰く
雙槻宮ハ十市の郡古老相傳曰阿倍信
寺乃ゐの山より西へ今ハ長谷乃里と
いふ是ありそこより東より松本山あり
池迫雙槻宮ハ橋豊日天皇用明帝乃御宇元
年九月より作りそめ日本紀二年四月磐余
乃川よりして新嘗あり〳〵日本紀より見
えそこより又二槻宮日本紀ともいふ宮ともいふ後
乃人はぐくみそこなへり
九十四年元
磐余池

履中天皇二年十一月磐余池を作りそめ日本紀
百傳磐余乃池より鴨鳥ゐるを見て
用明天皇陵ゐるべし
人皇世二代用明天皇ハ御宇二年四月より磐池
あり猪ゐるを七月より磐余の池上陵ようなる
日本紀
元年九月より河内の国科長山陵ようなる
玉林抄
武曰用明天皇ハ河内の国磯長原陵あり
延寛七年丙一千九十三年元
磐余若桜宮
帝王編年曰十市の郡磐余乃池の里こ
ゝ云当世池内村といふあり

若櫻宮ハ人皇十五代神功皇后三年正月誉
田別皇子を皇太子として磐余に都をうつし
給ふ是を若櫻宮とぞいふなり　日本紀　延
寳七年迄凡一千四百七十七年也

磐余若櫻宮　付　市磯池　掖上室山

人皇十八代履中天皇二年十月磐余に都
を遷り給ひし明る年の十一月磐余乃市
磯池に両枝舟をうかべてあそび給
ひしが御盃に時ならぬ桜の花ちりて
うかびけるをあやしみ此花乃もとをもとめしめ給ひ
ハんじと思せどもしかバ長真膽連
獨花をもとめて行しが掖上乃室山にて
櫻をえてまゐりしかバめでられ事に奏せ

けせ叡感ましまして若櫻宮乃名をそめ給へる
日本紀　延寳七年迄凡一千三百九年也

磐余甕栗宮

帝王編年曰十市郡白香谷是也白香谷
八城上郡にあり後乃人あやまりて
人皇廿三代清寧天皇元年磐余甕栗によし
て即位ましまししより宮城をもさだめ
しとなり　日本紀　延寳七年迄凡一千二百年也

磐余野

勅撰名所類字名所等に十市郡
夫木雑[illegible]百首
うき人にいはれの野辺乃花落ちてよりよめ[illegible]

磐余玉穂宮

人皇廿七代継躰天皇八年甲午に即位まし

川海にて泊宇佐より山背乃筒城に着
うたはれ十二月みやこ紀伊國にうたし
給ひ又女王九月大和國にうたしへ
給ふ磐余の玉穂乃宮にぞ治しめる 日本紀

延寶七年庚辰一千百四十四

磐余付猛田　城田　類桃田

磐余日名ハ所居又ハ所立 日本紀

磐余ハ神武天皇己未年二月そもそも紀
ゞへ給ひなんとて大軍あまくさ山に滿ぬり
日名ハ城あ〳〵あてて磐余と号し給ふ
又天皇嚴瓮乃粮をさきあしめ給ひく磯
城乃八十梟帥とうら猛ひなんとありて十
梟帥寅より屯聚居うりゲ天皇と戰わら

そひうどを沈よりかはをうり先より聚
余邑に入宮軍を猛田と城を
沈る類城田に賊衆うれ〳〵臂
桃に類桃田と日本
八十梟帥ハ兵方接之山賊八十人と云
滿乃メりの二字乃反ハしあり志りあきバ
イハしと入ふうべ〳〵

土蜘蛛

長門里乃ゆとりよる紀毘乃うへよ年
地あり土蜘蛛臺と入へり椋井の町乃坪
よあり注云三輪山乃南椋井村
に入ふよ土蜘蛛臺乃跡ありと云云

推古天皇廿年百濟國より味摩之

人衆朝ちりこげうう調よおて長の國乃妙ゑと
舞を始うりやをうりまちあうバとそ口うくとあ
川め稲井村めてあうハしめ給ハ日紀本今乃
諸ち乃妙ゑ乃舞是ゑり太子傳

阿部崇敬寺

出羽臺乃南よりあうべり奇願立石
安隠山崇敬寺智慧院ハ大日如来を安置せ
り孝徳天皇乃御宇大化年中よ建立ゑり
又文殊堂ハ浦願寺と号ちりもの宣中よ
光ありて光ちるり石窟よ拍乃ぬらけり高あり
其山と動し地と震しるにあやしやもえ
ぬ也一寸八分乃黄金乃文殊乃霊像まそい
まれを温ちる本生きる人乃ごし是と感

得して安隠山よ安置ち後よ安阿弥よ乃
ち仏量九尺乃人乃像とけうしめうの霊像と
眉間よ彫彩ゑ乃れそれゑり利生ゑくよあ
ゑうち効験日々よ向て真別永井丹別
切門和別安隠山本朝三文殊大士として信
仰あうざるハ縁起

▲文殊大士天降給ハ石窟ハ堂乃巽よあり
為代濱古と乃ゑり

▲中興開山遷覚阿門ハ豊後乃國人や暦
三年安隠山よ草室と向へ和尚と乃ゑ
顕密を学ぶ保延六年乃僧とたよ仏
号代こ乃へ乃ゑ海陀を勝仏して志ゑ
月ゑれるゑ沈よ端居めて氣後とりを後

二十七日伐採ぬまでも神社更よみがへれぬ遠
家よりくがひく仏堂乃下より鶴ヶ岡八幡宮
ぬまでも今よりまたうつくしく教書よりあり
年九十一

阿倍　丈木集ノ大和國

万葉
春霞立ちわたるとも馬ならば阿倍橋乃蘿の生ひで
山阿倍橋乃東ヶ谷ハ朝林探菜よのせ
所まつり

風雅集
安倍嶋山
玉勝間あべ潟山乃名寄藤ハえだも長ひ恋を
都ぶ独をふくりあへんあべ潟山を家ゆく通夫
安倍乃西の田中よ安倍仲麿乃墳ふ
ぶりのあまつり

膳部村

安倍山より二三町西ひの井ふ西
とて水ものれつり
膳部村ハ聖徳太子乃妃ありし妃女ふ井
とふてあつをしをあ丸そあ猪ひより妃
ゆ子の猪ふ鱸登佐ふりの世佐ども信
用しぐ死ふ　玉村
神中村よのもつまつ麻福田丸ぐ
振の芹ふを猪ひ西よハあつぼや法師と
つて智光とひくんなりふくハ元興寺
極楽坊乃西よあつ
高屋安倍神　付下居神
高屋乃屋敷ハ法ハ郡　松本山乃東乃谷

[illegible]
小社八幡村にあり
天安元年八月大和國高座安倍の神なり
橋橋下居神と從五位上より續日二年
座安倍神と從四位下より文德
実録にあり

鏡池　安倍村東にあり

鏡池は神代より日像乃鏡とかくしおとりや
後城下郡鏡化乃明神のみげ紅乃うらより
うたされそとりや激鱗なりとび
化明神のあり

萩田寺

阿倍乃南の萩田村に寺あり

萩田寺又は本願寺と也ふ長和三年多武の
峯乃検校聖昭乃遷立なり　多武峯記

二階堂

天香久山乃北表にありて高さ五丈
二階堂家にして草創ありて後は山邊郡より
うたされそとりや激鱗は山邊の郡より

天香久山

能義類聚云山あり西に流る人の
大和國のうたまのびうるあり澄月林
日は山あり西にうたまる来あり
や披縁にあるべうびと云興福寺
の西一二町ありて南浦とふあり
戸あり天神生まり事町なり

南方生土げりする造あり湯造とゝかゝ
祭礼乃時之事
よそで作る　山神湯造式風の事
天香山ハ伊与国風土記ニ曰天降乃時二所より
きこく所端を備国より伊与郡よりこゝ迄天香久山と
ゝり所端を伊与国伊与郡よりこゝ迄天
山と名付是なり　欽日本紀元年山を本朝乃霊山
として立て陰陽
師太神若宮より法そうこゝ山より天
とゝこゝ　長六合常国として蓋敷
河弟より職をなりて天香具山乃銅とゝ日
儀式をなりめ麻式うへ青和幣ゝ穀本
とう人白和幣ゝ　絵本綿乃初として

一夜ハ蓋茂山等乃儀式ハ是ハ今乃世ハ
豊御神ハ是ハ
ゝり山ハ
白幣手神の枝ハ　討林　探葉
ゝゝやゝ天若宮
同　天ハ
同　万葉　首者之事
久安百首　ゝゝ海士乃ゝ
建保会　香具山乃
白川殿七百首　ゝこ山乃
草根　目新ゝ
香具山乃宮ハ藤原乃御宇天皇乃離宮

ふくろう音敬ハ万葉集中一の長歌
我大君の万代を祈りてけるかれ香久
山乃宮代りをそなんと祈りや
香久山の社
大和國十市の郡あ所乃うく山よりまたい御食命
神なり 欽日本紀
啼澤女神
啼澤女神ハ香山乃畝尾丘乃樹下ゆまた 舊事紀
澤女ハ水神乃通稱とうや
哭澤乃神社ハ三輪もへいのまどもいの乃きつぐ
大君ハ言日をうまてね
眞善寺 香久山乃禁
天香久山眞善寺乃文殊院ハ本尊文殊大士

元来ハ法ちうぶ帝王編年曰香久山三学院とん
えうり
▲寺領世石豊臣幕下ゆ世給ひしより已来
頓安
仙覺抄藻塩草ハ大和國
神武天皇乃此宇天香久山の埴土をとりハ八十平
瓮をこしらへうりおいて海ゆて後神をまつり
あめがちぐ我者ゆめ世給ふそ乃土を取て埴安と
ゆふ 日本紀
上宮 揚井乃町の南六七町
上宮ハ聖德太子乃此父ゆくにまそうりをる用明
天皇ゆ乃太子をいとしこと海ゆて宮の
南乃上宮ゆまへさゆ給ひしより上宮厩戸豊

聽耳太子と申奉り紀日本又上宮太子とも

書紀玉林抄

▲上宮寺の類ハ後鳥羽院乃震筆也上宮村より今よあり

清古上宮の東六七町

清古ハ阿隈乃文殊の隆濫乃池あり

陵

山道より陵やまんしもの墓し清古村より二

基ハ横井より十町ばかり西へ一陵あり

上宮村の西乃方より一陵あり

なるべし紀橘橘村乃北ハ一基あり

食橘宮

詮要云多武峯の東乃ハ食橘乃里の

ちよもしの里乃西乃方にて小社あり

ハ上宮村より十町ばかり東より食橘村の

食橘宮又ハ来槙の宮とも云紀古支人皇世二

代用明天皇二年八月食橘ハ宮ばかり

橘ハ紀日本延賓七年丙辰一千九十三年乃

橘川

ふるさと川水上ハ多武峯と音石山より

あゝ乾よりながれ行寺枕曰食橘ハ丹後

也駿河乃也あり先達大和也と云仙覺

抄物撰者所等大和国城上郡と云ハ

川も京城上郡よりながれ行

六拾

家よのもとにしてし食橘乃峯の白雲ハ

食橘乃離宮

慶雲二年三月倉椅離宮よりさのゝ行幸
日本紀
倉椅齋宮
秋宮は天武天皇七年乃春天神地祇をまつり
給ひしとき天下をとゞめ給へ御してくらゐの
川上に秋宮をこしらへ給ひ四月に行幸あり
なんとありしかども十市皇女宮中にして薨
給ひしにより行幸もあるべき神祇のまつりを
やこに紀十市皇女は赤穂にうせ給ひ
日本紀
下居宮
椋橋村よりゆき六町ばかり多武峯乃
ひがしに

人皇世三代崇神天皇即位四十二年倉橋
の宮に住給ふ日本紀 本山石ハ今ハ山乃下
居乃東也此ハ山ハ遥に遠ク見ゆ 七巻抄
崇神天皇陵
多武峯の東に山陵あり崇神天皇
の社西にもひがしにあり
人皇世三代崇神天皇八年冬十一月初
住給ひしに倉橋宮乃陵よりうまれる 日本紀
大和國十市郡にあり 延喜式
一千八十八年
倉橋山
倉椅 日本紀 倉椅 古事紀 椋

橋三代実録 ゆてもり龍岳嶺より西ハ市の郡東ハ十市郡二郡よりの境

万葉 金橋の山 紀 ゆてもりよりの東ハ丹の所待那

貞観十一年七月八日山の洋々たる峯高さ二丈深さ一丈二尺中ハ一鏡あり廣さ一尺七寸禁裏よりなる 三代実録

多武峯

三方ハ路あり東ハ金橋より十余町西ハ細川坊七町北山四十九町北山乃西ハ

今ハ池 記

史多武峯ハ釈迦ハ仏勝乃ゐる山西ハ金剛山南ハ金峯山北ハ

大神山中央ハ多武峯 荷西 紀

万葉 多武の山 細川乃瀬を渡さる 舎人 皇子

鏡山妙楽寺 寺領三千石二朱

鏡山妙楽寺護國院ハ定恵和尚乃草創なり

山号或ハ鏡山又ハ鏡峯又ハ鏡民峯又ハ多武

峯又ハ龍岳山

称鏡山ハ中大兄皇子 天智 天皇 中臣の鎌子連と

心ゆるしなり 入廉臣 と謀して国をぞやりかへ

ゆゑなりし 鎌足 ゆゑ得て城乃東金橋山

乃峯藤花の下にて山中ものびやうかうし

ひ給へ ばゆゑなりて 義 我天位

よのがれんゆゑ 汝 姓 とあらくめ 藤原 氏

と宣ふその鏡しるしあるまゝ鏡峯とぞいふなり

縁起 又ハ此時談武峯と名づくを縁ふ御乳花頒又龍集をと
ゆふハ此山乃うしろを音石峯よりりんにてを八大龍
起来てく左ぬ見んへ其の頭腹付のかげらよ尾返
そうしてくやうよみん修きハ此山名あり 縁起
▲十三重塔ハ定恵和尚乃草創として此寺みん
じめなり此地座よ大織冠乃遺骨を納られ
丈山乃塔ハ定恵和尚白雉四年よまゐりて
了聖皇のミなうじ清凉山寶池院の十三層の
塔をうつし比そり唐朝の舟よつミ縁ひしかども
塔材盤万めして一層ハもろむしよ新し白鳳七
年九月日本国よ着岸ありて此寺不比等よ
對面ありしよ又大織冠ま和尚在唐乃時薨ぜ
られしを摂津国阿威山よをうふりなりし

説くてり縁ひ父和尚我ひそのに亡父乃祠を関く
和州談峯ハ霊勝乃區まろ也し五臺山よまさるとせ
我代りしめに応う海りなんま子孫益ゆの久ぐハ
あらじとなり又我まろむし亦あり又時数乃ある
そ我身ハ談峯よ葬りよ大織冠後かんく汝世縁
ひく君今天上よ生まうるも此地よ寺塔をん
せなミ佛乗我後をよ去る時巳巳歳十月十六
歳二更なり不比等先君の薨をうきしを云
まの月日じ夏乃のとさ蔵後をひとひうそ縁不忠
なありて和尚阿威山よ行遺骸を也りて談
峯よ葬うへるまとろ乃人よ来朝の塔を建て
報くよ一重不足とおげ又ありしくだなろむし
よのありし塔材雲よ乗じ風よまきるひて

絶まりて後よ十三重乃塔とありしくべ文殊
菩薩式宮地ありてもんくもとうり 釈書 白鳳七
年より延寛七年迄凡一千二年元
▲聖霊院いしく異光時く大木乃迄よあらん
もしくり定恵和尚方三丈乃御殿と造くろく
荷西記 玄後延喜十四年真罪大法師長者真信
乃よりの人えまりしうぶ営造あり 要紀 又大織冠乃いる
像ハあふこの国高男丸乃而造あり 荷西 又検校千
満法師ハこりまるもあり 古老相伝曰高男丸
が而造乃像と子満法師乃作くれる像の中よ
納まりて安置くしあり 後紀 右ハ定恵和尚
渡海乃ゝ神階ハ正一位勲一等又延長四
年よ贈山槍現丸勅号を給ひあり 縁起

▲斯寺ハ聖霊院と号し寂寞ゝして心式
ゝ為構門軒とくくゝ寂寞ゝとくくゝ
うり西り十三方乃塔婆くとして眼式おぞろ
構政右大臣藤原伊尹乃そくまり常
行三昧堂ハ世くよ後くゝ定恵和尚乃遺
像堂如覚禅師丸敬向よ七十余所猶大明神
ゝくくゝ顕寺乃社定慧和尚乃草創乃謀
堂大納言經輔ゝ大臣藤原長房乃法祀の
温室寺くくりうり
軒とくくべうり
▲定慧和尚乃くく強ひ金堂実性僧都乃
如法堂村上天皇乃勅願 法華三昧堂
政右大臣伊尹乃願 曼陀羅堂四韓院乃勅願

の青門堂座主真昇乃食堂等ハ多ハ焼りぬ
ばるや乃衣のこだりり我のこりまる法伽藍は
らく〳〵畧記よりこり
▲大織冠乃ゐる像ハ天下よ凶事あるべハ破裂し
給ふ先永承元年正月廿四日衣の御西四寸余破
裂し給ひしより已来文治三年迄十三ケ度
ありそ後代ごとに破裂乃ごとく叡門代
治ねまべハ勅使登山ありて宣命ゆ読み給ふよ
ハりるりぞ金ゆ也給ふりハ畧記より
▲再興ハ人皇七十二代白河院永保元年園
三月廿日ゆ、山青石乃民宅より火も
えあがりて堂舎仏閣一時乃ごとく焼
是興福寺の僧乃意恨を抱くこ殺向ふく火

おもきりとなり 畧記 ▲人王七十四代鳥羽院天仁元戊子年九月十
一日興福寺乃衣依蜂起して堂塔ゆびり
法院法勝寺山郷迄ゆとりとなり畧記
再興あり
▲人王八十代ゐる後鳥羽院嘉安三癸巳年六月廿五
日又興福寺蜂起して社ゆ迄ゆ焼畧記
同御宇治嘉元年十二月二日谷堂ありて
十三重乃塔ゆ焼る邪至ハ大和国廣瀬乃
任人右馬允康教ゐり畧記 ▲後寛文七年迄
遂覆あり
▲開基定恵和尚乃墳ハ當寺よあり碑曰入唐
求法沙門定恵和銅七癸六月二十五春

秋七十餘座遷化矣 紀ども 定恵和尚乃墳ハ
山城の國木幡寺にあり 畧記 史 定恵和尚ハ孝徳
天皇の妃内侍 著帯六月よりなり給ふ 天皇大
織冠をめしてゝ乃妃と 汝ぐそひ姫 よえ内侍
ちんはまうんよ女をうゝバ朕ぐ子やをさん男をうゝバ汝
ぐ子とせよとの勅をうけ月満ぬまゝバ男ぞうま
き給ふ則大織冠乃子やゝ所の門恵隠乃貴子
やしれしくぐりばかろし定恵とぞ 紀 釈書 母ハ
車持史人車持國子乃むすめあり 畧記

▲僧賀上人乃墳ハ當寺乃乾にあり 上人ハ
参議正四位下橘頂平乃子にして若冠とい
位りもくみぬる年をのぞき給ひ後或時内海義
乃祐行ありしよハ乞正人にしてうちあ

そひしるべをそうきこうり又 紀 師より 紀 慈恵
乃僧正に任ぜらるゝ乃あ駆にまちくく千鶴
丸太刀を帯びうるゝ女半にの紀ぞの
みうゝ太皇大后乃戒更あらんとあれな
宮中にのぼり兼 紀 ぬくうちあうき又
佛乃御眼にはけぎ行てはゆんやを
うゝしてゝ宣しくくへうき紀を後 紀 列
より下向乃道をぐうき長 紀 深にありて 紀 数山に
くりそれより多武峯にこりおりて 紀 義
老の時 紀 ひとり碁盤にむかひ坐をるぞ 紀
をるぞとうちあうそふのをうゝ障泥とう
ぜきて小蝶乃舞にに袖をとゝれけり 紀 よ
門前ぞあやしくいうるきバとてうゝ 紀 ぬ

ハ我ハ世をあらりし時ハ三年ハ人よりあら
きくやめゆ紀若一念のこりうんよ生死の
報をあらりやうんとくくそハ生死あく
へくこりう長保あ六月八日よ
みりきくもハ十あまり乃花の波海月の景あひ
世縁じて九日よハ金剛界をもとび安楽とし
浴ととる年八十七三年ハ弥陀ハ廟ハひくく
よ金剛や始きぞ及ぶ変ぜげるやうや経書
往生傳毅心集増賀行業記をどうんこり
▲出覚猛師乃墳ハ信よ飯盛塚と父りは猛
師乃父ハ九條右大臣藤原師輔公母ハ延喜
帝の皇女あ秋宮雅子内親王ありらハ
右ハまりおさ若とぞ関えくおひこら猛ひく

ハる光乃ゆるやうりとと心あるる人よ
てこれよあひなりこりるる時ハや車よりおり
て物とまろがみをこうくまくこなりてまやくこり
ゐりてあんとゆりきるやぞ又月のこ海をあり
きみちぶりてめぐくこ紀を見猛ひく
く沖漕ぐこ九尋の海にこもやゆくこもある月ま
やとよみ猛ひくくこ乃暁よあ猛ひく法師よこり
猛ひよりみのぞもゆみぞうあこれぐこ猛て
旅より雲ハ心重こひ真山乃横川の折ハ生をよりらん

西久くし

九重のこりおを法ハ蘆こて雲乃重ハ山ハ生を
ちぐめハ横川よ海を猛ひくこぞこ浦よ多武峰
峯こりまを如乃一帰紀寂光乃拠乃大猛猛

世継をどめくりくんくうれ

玉葉集

玉葉洞

類字名所よ来歩と云云多武峯よ岩あ

利玉葉の洞也

紀夜手り紀山よ多へて玉葉洞の風流多ゐよ

山歌は多武峯乃回紀乃詣り書ゐへ

て玉葉乃洞は当山の異名也ゆえり異

れ接多紀りもあらぬ山歌ハ彩りの

観音宗意法師よ岩ひきるとも玉葉

集よりくり宗意法師ハ当山乃住

僧めく歌ゆくよあ利乃法師よ

岩ひ也ゆふハ変乃事よりも侍るん宗意

法師ハ文ハ越前守懐平如ハ祭主輔親の

女なり

諸山

藤原為家よ陸奥国と云云 信山乃名よ

ゐより一往あらハ後の人ハぐ先

方々集

小夜文くく信山乃時る徒孫光の家よ云云 肥後

ゆべし

宮

両槻宮

文槻宮又ハ天宮也ゆふ欽明天皇二年後

飛鳥岡本宮紀起くうたりを信ひく又回

明顔乃めぐりよ頭の上乃ゐ槻の樹

の通よ言殿をくく法槻宮と号し又天宮

とも名づ也信ひ文時よ興事ゆのを則香山

乃西より石上山よりて渠とりを二百

後ゐて石上山の石紙流よりくだりて
紙ひろきく賞の東乃山より石紙くだりて
ゐたるより時の人ゐたるそのくに心乃渠より
史乃くるみやゐたゐより渠をもりしよ切史
三百余頃代ゐたくるり文七万余ゐ賞の
材瀾山椒埋もまて文人そもりて石上丘を
ゐたくるものぞくるよ破きをんとゐひけり日本紀

漢海石墓

山墓ふびきしふきまぞ帝王編年よ添
上郡崇良よありと剛を墓ゐふ
もりあり物ども延喜式に家ゐ平よ多
年号よありと伊きばくぐゐべよあり
ぞ山ゐとくくふびゐ猪ゐべ

太政大臣正一位漢海石藤原朝臣乃墓矢紀
国十市郡多武峯ありて延喜元正天皇
養老四年八月一日よ薨りとて石紙文
忠石ゐ猪ひくりより延寛七年ゐ九百六
十年ゐ

春井

多武峯乃西のゐとりあり市の郡の
うりまて伊べくれども多武峯
よりて寒よあらぞ
聖徳太子出産湯よりて東井千歳井赤
淵井のこりゐ乃井ゐとりをくり二川の井ハ
くこれくく春井のこまり人喜井乃霊水
とゐふこれより撰集新通要よりくんり

法華寺

多武峯より町ばかり乾念誦屋
多武峯より言市の郡なるべけれども多
武峯乃山内なれば寺よあらん
法華寺ハ僧賀上人の廟所なりしかば多武
峯の講堂乃下よりおこりて後三年を経
て寛ようしつへり上人の俗ハ讃山姫
乃寺よりあらん因如覚禅乃弟ハ多武
峯ゝ町ひゞ飯盛塚とこれなり俗ハ姫
よあらん記

音石寺

多武峯乃東北よりあり多武峯乃
末なるべし

音石寺又善法寺ともいふ本観音乃霊感
乃地なり勝宝元年門心禅の草創なり後
天長年中賞蓮あり額生安帯中納言入
道国香記

耳梨山

俗ハ天神山といふ和八木村乃東よりあり
仙覚抄十市の郡又耳高山ともいふ
とゝ山ハ万葉集ハ藤原乃宮乃南乃方よ
りゝ耳無川乃辺よりくれ耳無池
もこれのことなり

万葉

高山ハ雲根火雄男志等耳梨とあひあらそひ
し神代よりかくるよりいまへを後よあ
まこそ蛾を汝とあひあらそひし

懐中抄 あるくに人は耳成山の名をかくしてとをりぬ

耳梨行宮

推古九年の月天皇耳梨の行宮より行幸あり

後人日本紀

耳梨池

ひとり女ありけり 髮児やとなんいひける男ありけり

三人して意あらそふ女せんをえ給はんとて

相ぢかやう我身一つ清なんは霧りもうろし

三人乃男の心和年ぐ〜死は有のごとし池よりは

池めて身をぞなげける三人のおとこなげ

死よ恨ぞ〜てよあれ万集

万葉 無耳の池しらに死もあるべきうれば

同 思ひ乃山うつ〜れ池と和よ蓋をはりこまを

同 思ひの虹縫乃児やどにいけまこ天隠をとんつさをん

耳無川

耳梨山の東乃麓をなづれてゆよ行

六帖 同なつ川みくるの川のたゞをさをぞありぎ人をとうこげ

同 吉川

藻塩草よは大和國と云 耳梨川 歌 合

をるよ海ををく寒よあらうに同吉川

ねえんば

村山

万葉 し、常よは村山あまでとりくよろよ天香具山のぼ

つと立國人紙をこばゆ立鈴海苔は

加萬同立多都怜阿國曽晴島八間所綾國

者

高山

藤原宮より大和國類字名所より十市郡

万葉 高山と耳梨山とあひ時ならんかも之伊賀國

波良

澄月尋枕曰高山歌不詳之高山長嶺有之細

紀又八雲抄又常陸國なる之紀と云云今按

万葉集第三曰丹比真人登筑波岳作歌

鷄之鳴東國不高山雖有是唯憩高山や非別名者一所名紀又

他別名所と云云

十市里 敏夫山の乾

竹取翁物語より大和國ととらの山ありよあるる

山寺より賓頭盧のおはちらの山ひさらよ

清輔集 あふ事のとをちの里ハ大和國にもあり

屋代水府説 三芳野乃里と云とらの山橋のある雲よ

幸清法師

山歌沈月歌抄ハ唯幸紀と申てよあり寸

市郡誌あるよあらぬ歌抄ハ

えうり

多社

八木村一里ばかり九品寺村乃内町

良よあり

多坐

常盤里

多坐

坐志理都比古神社二座延喜式

藤原宮より大和國と云云山城國より関右あ

と耳梨山乃ひさよ常盤村あり

草根集 こぬ人を待ちぬる松のげ苔と見えし星ぞあきよき

穂積

俗に蒲津ともいひ十市の郡押のくづき

よあり

現存社 水無瀬殿穂法をよめる歌ども

竹田村の西

大津坂上郎女竹田の庄作歌二首

万葉集 ぐるぐるに百代小田をとりみてり田廬爾居者

京師所念

同 隠口乃泊瀬山いにしへゆ人の越ふるとなりにけり

十市の郡神名帳十九座 延喜式

多坐弥志理都比古神社二座

十市御縣坐神社

石寸山口の神社

耳成山口の神社

坂門神社

訓尾都多本神社

皇子神食神社

小社神食神社

下居神社

同原坐弓御魂神社二座

訓尾徒土安神社

竹田神社

子部神社二座

天香山坐櫛直食神社

姫皇子食神社

屋就神食神社

和州舊跡幽考第十九卷次

和州舊跡幽考目録

第二十卷郡未勘

滋巴　大嵩峯　大我野
御間坂池　口無山　志賀我高嶺
樟葉宮　大阿刈　佐保川
上安池　打迴里　阿保山
安太師野　標野　佐羽山松
多奈久良緒野　匂の丸池
中山　鳥栖山　絶間池
玉井沼　赤層山　跡見乃岳

弓削川原　見馴河　大和嶋
姫見崎　歸市　鵜池
木敢宮　鶯関　多能代池
宇治間山　猟路池　おしの浦
酒匂の和山　孫豆山　下樗山
高瀬川　宮瀬川　小豆野の池
うね見の池　ふのみやま　甘樫宮
司穂宮

和州舊跡幽考第二十卷

郡未考

滋田

八雲御抄よ志げ田乃宮　万葉よ
万葉滋田よ神ぬびゝ　よ志げ田と云く　勅撰所よ大和國
大鴻峯

八雲御抄よ藤原　万葉
妹ゝあゝり行てか南と大和乃大路冬よ藤もあり

大秋野

万葉
山路乃ゝ　ゝ草よ大和國
御間坂池　乃竹葉竹數いろ〻

俊頼大部百首
いせのくにしげ木をとを海一大和国忠房
さらの池

澄月亦枕
大和国吾山の山人はいそぐ秋高顔
右志義秋

万葉
霞ゐるそらをすけとの一とをもとる梅の枝
樟葉宮

類字名所
河内国一説大和国

続古今
墨ゐ乳母をみのうらに新そまつぐ小宮の秋月 南日左大臣

大野

八雲御抄
流れ出る国りかぬ伊国

万葉
はるの野と思ひていろ大野のうら三笠社の神ーさらを

飯森橋

文木
春あるる洞の月の絶をひばりげ花ぞけるうそ鶯の橋路堅

上安池

藻塩草
大和国

万葉
上安の池の堤のうそれの行末はたれかはりはるる人九

打回里

仙覺抄
大和国

春雨抄
梅の月光月とはうら後人のるもそうはれ里の郭乃花

阿保山

八雲御抄
大和国

万葉
阿保山の花宿木の花はうそもちり海ぬ人なる人

安太師野

そーの草よ山城国又大和国

月清 人の世を思へばうづてわづ野のもりが松ひとりの秋 良経

標野

拾遺愚草 鶯宿経所より大和

久々に天津空の月影をとのゐ所の野の秋の夕暮 定家

万葉 白鳥の鷺坂山松の秋ぞ来てなくこえ聞くと 家持

鷺坂山松

藻塩草より大和国

万葉 多奈久人良の浦の野

手束弓なほ引き寄せて朝狩に我を立いなば誰か手本

或紀伊国とよめり神中抄云手束弓良の浦とも

考紀伊国国史記云弓ノ名ヲ出サヨ

もろかるり紀乃国の実守ゲの川ちかりと云く

宗祇法師の国もとけ藻塩草より大

和国

うづの池

藻塩草より大和国

中山

元輔家集 さるるうぶ思ひやうとうとうとうぬ都中山の秋の月

鳥栖山

藻塩草より大和国

和泉国 澄月弁抄より国素秀

懐中抄 物うれば泉式ア抄よりやはりの乃国

絶間池

藻塩草より摂津国或大和

良玉
憑まれて[illegible]浦の浜[illegible]
越年の浜　常陸

[illegible]の浦は大和國

[illegible]の浦や[illegible]の浦乃[illegible]

赤層山

類字名所[illegible]

文本
[illegible]山

跡見乃岳　顕伊

[illegible]は大和國

万葉
[illegible]見居を作歌

射目[illegible]

[illegible]見乃岳辺乃[illegible]

[illegible]吾八[illegible]寧樂人乃[illegible]

弓削川原

濃尾平野　桃の河　河内國　仙覺抄　八雲御抄

[illegible]は大和國

万葉
[illegible]川[illegible]の[illegible]

見野河

類聚
類字名所は大和國

いそけどもつりやう[illegible]　河内　西うりつ

大和嶋

[illegible]は海と[illegible]日本國乃總名

[illegible]定[illegible]

[illegible]

文本
天雲は[illegible]

狩見埼

八雲御抄[illegible]は大和國

常陸井入道

万葉 大伴坂上郎女跡見田庄を作詠

妹ゞ見とすんそめ川の紅葉ゝは散りこすなゆめ

六百番哥合 海市

やまとゝ海やまとの市女とりんあやまちをいくばく要強

顔池

藻塩草より越前国又大和国

文木 秋もいさ立ちりてうんあ光輝乃池より秋やひろもと 後人不知

本願寺

八雲抄より大和国

一万葉 八雲抄より大和国

水食同本願の寺常寂と定めて海ひくあさちふ

寓浦

藻塩草より大和国或ハ河内国元又四

和泉国元

明玉

秋ゆふ心を法ゆ行義式めさでもとめようこひ水鏡 康資王母

蛍雲より水草より大和国或ハ河内国元寓

哭り草より大和国或ハ河内国元藻国

舟橋より河内国と云く

八雲抄 魚住池

八雲抄 藻塩草より大和国

ゆりまちもり門やけくさんあたりのひの池より 蛍藻

宇治間山

八雲抄 仙覚抄 藻塩草より類字名所井蛙

抄 古今抄 橋より大和国ゝ云れども故法師宣

為宇治間山 紀宇治川乃色乃ゆ

ゆ海まてく伊り定てゆ細伊りゆん

山乃滝 紀ハ朝林撰集ゆ

ものゝとんゝ伊乃
持統天皇吉野の宮より御輦の時
続古今 宇倍乃山霞の間より
万葉 長皇子遊猟時柿本朝臣人麻呂
馬並てゆくりよそ見あるとて
よ廉こそいはひふるさ
同 遠津人かり道乃池よりもむとりの
てを

和州舊跡幽考
古詠未考
おゝ乃ゆ
藻塩草より大和國或ハ越中國ゝげぢとも
海紀乃和山
同書より大和國
源豆山
同書より大和國
下檜山
同書より大和國
高瀬川
同書より大和國ゝ水ゝゝゝあり伝芋掘の津也
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

き山勢川
八雲山称すべかるべき大和国
水茎野乃池
八雲山称すべかるべき大和国
うゑ川の池
すべかるべき大和国
きのみやま
八雲山称すべき大和国 あるべき世にもなかりけり
耳梨宮
同書大和国
司穂宮
すべかるべき大和国
和州旊跡幽考巻二十終

和州旊跡幽考者予旧友宗甫翁之所作也一日翁持此書来被示於予就繙閲之茲和之中古蹟之賜探索無遺古人云西湖之勝可言不可悉矣吾土亦然乎今見翁之志其可謂勉也翁需跋尾於予不得

固辞遂書数言以投呈乎

延寶九年辛酉夏之孟

懶齋龜藏書